

前近代における人口移動－在郷町郡山と周辺農村の比較－

Migration in Early Modern Japan:

A Comparative Analysis of a Local Town Koriyama and Neighboring Villages

黒須里美（麗澤大学）・高橋美由紀（立正大学）・長岡篤（麗澤大学）

Satomi Kurosu (Reitaku University), Miyuki Takahashi (Rissho University), Atsushi Nagaoka
(Reitaku University)

Email: skurosu@reitaku-u.ac.jp

1. はじめに

本研究は福島県に残る人口史料を利用し、町場と周辺農村の人口変動と、移動パターンについて分析し、同地域における町場と農村の人口学的同質性と異質性について考察する。18世紀から19世紀始めにかけて、天明・天保飢饉等の打撃をうけ人口が減少した東北地方にありながら、町場である郡山は、飢饉時を除き、常に人口が増加していた。しかしこれは人口流入による社会増加であり、自然増加に関しては農村的要素が濃いとされる。歴史人口学研究の史料の中でも最も良質で長期に続くとされる二本松藩の人口史料を利用した研究は数多くあり、近年ではイベントヒストリー分析を利用した死亡・出生・結婚の詳細な分析もなされているものの、移動に関する研究は数少ない(Tsuya&Kurosu 2004, 高橋 2005)。本研究はまだ活用されていない移動情報を用い、GISを活用した空間的分析を取り入れ、在郷町と周辺農村のよりシステムティックな比較分析を行う。長期的変化に着目し、人口増減の差異に迫るとともに、前近代における人々のライフコースを時間的かつ空間的に捉える可能性を探る試みである。

2. データと方法

分析には、陸奥国安積・安達郡の人別改帳をもとに速水融代表の研究プロジェクトで作成された「ザビエルデータ」を利用し、麗澤大学・人口家族史研究プロジェクト¹において、移動先・元の地名の緯度経度を比定した情報を加えて構築しているもの（進行中）である。二本松藩の人別改帳は、史料作成時において藩が人口増加を重要課題と考えていたこと、藩および在方における統治の安定性により、その詳細度と信頼性において残存する史料の中でもっともすぐれ、その詳細なデータと内容の均質性は、比較分析のための格好の材料である。さらに、人別改帳が示す移動情報は対象となる村外の村、世帯主名を含み、移動が何のために、いつ起こったかを判別することが可能な、この時代の移動行動の研究資料として世界でも類を見ない貴重なデータである。

分析に利用するのは、郡山上町と周辺の2農村、下守屋・仁井田村のデータである。郡山上町は宿場町であり、観察年間の1824年に町場昇格運動が起き、正式に「町」となった。町場昇格時期には一時的に周辺農村からの人口流入は増加するが、その後の流入に占める

¹ 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業「人口・経済・家族の長期的研究：多世代パネルデータベース構築」（H27-31 代表 黒須里美）の助成を受けている。

割合は周辺農村からは低下し、越後からの人口移動が高くなった。データの詳細は以下のとおりである。

町村名	期間(年)(欠年)	計(人年)	移動(イベント数)
下守屋村	1716-1869 (9)	48,755	3,552
仁井田村	1720-1870 (4)	67,130	6,209
郡山上町	1729-1870 (18)	194,878	25,269

3 町村のデータを利用し、(1) 人口の長期的変動を自然増加率と社会増加率から分析し、(2) ライフコースの視点から移動のパターンの特徴を比較し、(3) 移動先・元の地名の緯度経度情報を把握し、GIS を用いてどのような地域間及び理由で人々が移動したのかを、年代による違いから明らかにする。

3. 分析

人口変動を見ると、農村において当初安定していた人口は 1750 年以降減少に転じ、大打撃をうける天明の飢饉(1780 年代)迄に、人口は当初の 2-3 割減少した。更に天保の飢饉(1830 年代)の影響を受け、1840 年に漸く回復にむかう。一方、郡山上町は、1720 年に 700 人程度であった人口は上昇し続け、天明・天保の飢饉の影響を受けるものの、すぐに回復に転ずる。幕末における人口は観察開始時の 3 倍以上に膨らみ、その持続的な人口増加は、周辺農村と対比すると、際立っている。

その持続的な人口増加の背景には自然増加率よりも社会増加率の違いがあった。人口流入・流出ともに郡山上町では農村の 3~4 倍の量が観察された。人口移動は在郷町でも農村部でも天明期あたりまで活発だが、その後 1790 年代辺りから、移動率(流入・流出ともに)が減少し、特に 1840 年からは、在郷町・農村ともに移動率が大きく減少する。農村側からみると主な移動理由は奉公と婚姻であるが、このうち奉公による移動は 19 世紀に入ると大きく減少する。在郷町からみても、18 世紀に多く見られた周辺農村からの奉公による流入が、19 世紀には少なくなり、代わって越後からの奉公や引越による流入が増加した。これは、この地域の社会経済構造の変容から説明可能である。二本松藩全体で 18 世紀後半に採られた殖産興業政策は、周辺農村において、特に女性労働需要に対して正の働きをした。したがって、周辺農村から郡山への奉公流入が減少した。また、それに伴う農村における経済的安定は、地域の自然増加に対しても正の働きをした。町場である郡山も、周辺農村とともに活気づき、遠方からの奉公人や、引越による流入を増加させた。

一方空間的視点から見ると、在郷町、周辺農村ともに、広範囲からの人口流入がある。報告では、在郷町と農村の人口移動の比較から、地理的条件、環境要因、組・藩などの行政単位、そして越後百姓の積極的招聘などの政策的な影響を検討する。

<参考文献>

- Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2013. "Social Class and Migration in Two Northeastern Villages 1716-1870." *The History of the Family*: 18(3): 1-22.
- 高橋美由紀 2005 『在郷町の歴史人口学—近世における地域と地方都市の発展』(MINERVA 人文・社会科学叢書)